

心の芽

小川未明

青空文庫

ある日、どこからか、きれいな鳥が飛んできて、木にとまりま
した。腹のあたりは黄色く、頭が紅く、長い尾がありました。野
鳥のように、すばしこくなく、人間になれているらしく見え
るのは、たぶん飼われていたのが、かごを逃げ出したのかもしれ
ません。

みんなが、大騒ぎをしました。大人も、子供も、どうしたら
捕らえられようかと、木の近くへ集まりました。正吉は、胸
がどきどきして、自分が捕らえようと、心にきめると、みんなに
むかつて、

「あの鳥は、おれのものだ。わあわあいつちやいけない。」とい

つて、彼は、すぐ鳥のとまっているかきの木に登りはじめました。

鳥は、そんなことにまったく気づかず、さものんきそうに、あちこちと景色をながめていました。見ている人たちの中には、うまくつかまればいいがと思ったり、あるいは、早く逃げればいいのかと思ったり、てんでになにか考えていたであろうが、とにかくだまつて、正吉のすることを見まもっていたのです。

正吉は、木の幹の蔭で、なるたけ自分のからだを隠すようにして、音をたてずに、ねこがねずみをねらうときのようなすつくりで、すこしずつ鳥にしのびよつて、もう一息というところまで達しました。そこで考えていた彼は、おそろおそろ手をさしのべたのでした。

「うまくいったぞ！」と、み見ている人の中ひとなかから、いったものもあ
ります。

しかし、あまり鳥とりが美しいので、つかまえる手てがにぶったか、
指ゆび先が、尾おにふれんとした瞬しゆん間かん、急きゆうに鳥は、おどろいて飛と
び立たちました。そのとき、正しょう吉きちのからだも、いっしよに木きか
らはなれて、空くうでもんどり打ち、地ち上じようへと落おちました。

「鳥とりには羽はねがあるが、人にん間げんにはないものを、なんで、手てづかみ
ができるものか。」と、こんどは、み見ていた人々ひとびとは、口くち々ぐちに
ののしりながら、氣きを失うった子こ供どものところへ駆かけつけました。そ
して、だき起おこして介かい抱ほうするやら、親おやたちを呼よびにいくやら、
あわてふためいたのであります。

この村には、専門の医者がありませんでした。内科と外科を兼ねた頼りげないものしかなかったので、治療にも無理があつたか、正吉の折れた右脚は、ついにもとのごとく、伸びずにしまいました。それから、不具となつた少年は、友だちからばかにされたり、わらわれたりしたのであります。

彼は、ろくろく学校へもいかず、早くから、町の縫い箔屋へ弟子入りして、手仕事をおぼえさせられたのでした。生まれつき器用の正吉は、よく針をはこびました。

「正吉、この金紗の羽織は、仕損じぬよう、念を入れてしなよ。」というように、主人は、注意しながらも、上等のむつかしい品をば選んで、彼に扱わせるようにしました。そし

て、でき上がりを見て、いつもほめたものです。

だから彼は、いつからともなく、ほかの弟子たちを抜いて、仕事の上では、主人の代わりをしていました。この店は、町で古くからの縫い箔屋だったので、金持ちの得意が多く、また遠くからも、注文を受けていました。

しかし、なんによらず、世の中のこととは、いつも同じような調子でいくものではありません。いろいろの関係から、たえず変化していくものです。これまでも、新しい器械が発明されたとか、新しい思想が流行するとか、また、戦争などということがあつて、栄えた職業が、急に衰微したり、また反対に衰微していたものが、復興する例は少なくなかったのです。

こんどの世界戦争は、我が国のすべての産業に革命をもたらししました、縫い箔屋という商売が、たとえ一時的にせよ、まったく衰える状態となり、この店もついに閉店して、
転業を余儀なくされたのでした。

ここにいた、若い、健康な男女は、それぞれ工場へいき、活潑に働いたのですが、正吉は、それらの人たちと同じことはできず、ある電気工場へ勤めて、体力にふさわしい仕事として、ニクロム線を巻いたり、鉄板のさびを落としたりしていたのであります。

ある休みの日に、正吉は、前に奉公していた、縫い箔屋を訪ねました。主人は喜んで迎えてくれました。主人も、ま

だ老人ろうじんとはいえぬながら、もはや工場こうじようへいつて働はたらける年としではなく、さればといつて、ぼんやり、その日ひを暮くらす気きにもなれず当惑とうわくしていると、ちょうど総選挙そうせんきよまゑ前で、筆耕ひつこうをたのむものがあつて、そんなことをしているのです。

「すこしの間あいだに、世間せけんもだいぶ変わかつたものだ。」と、主人しゆじんは、いまさらのように、腕うでを組くんでいいました。

「はい。」と、正吉しょうきちは、答こたえました。

「こんどから、おまえにも選挙権せんきよけんがあるんだね。りつぱな人にんげ間一人前にんまえになれたというものだ。だから、貴い権利とうとけんりをむだに
してはいけないよ。」

「はい。」

「^{かんが}考えてごらん、これまで^{わたし}私たちの^{だいひよう}代表として^{えら}選んだ^{だいぎし}代議士が、ほんとうに、^{わたし}私たちの^み身の上^{おも}を思つてくれたといえるかい。いいかげんな^{やくそく}約束をして、^{みんしゆう}民衆を^ふ踏み^{だい}台にし、ただ^{とうせん}当選すれば、いいとしたのだ。そして、いよいよ^{けんりよく}権力を持つと、^{じぶん}自分たちの^{つごう}都合ばかり^{かんが}考えて、^{たいしゆう}大衆は^す捨てられてきたのだ。」

「はい。」

「むつかしいことをいうようだが、わかるだろうね。」と、^{しゆじ}主人は、^{ねん}念をおしました。

「^{ふか}深いことはわかりませんが、^{いみ}意味はわかります。」と、^{しやうき}正吉は、^{へんじ}返事をしました。

「それは、^{えら}選んだものにも^{つみ}罪があつたんだよ。人^{ひと}を見る^み目がなか

つたのだ。ただ、空^{から}宣^{せん}伝^{でん}におどらされたり、山^{やま}師^しのようなもの

にあやつられたからだ。これからは、だまされてはいけないし、

強^{つよ}くならなければならん。そして、真^{しん}に、自^じ分^{ぶん}たちのためになり、

力^{ちから}のないものの味^み方^{かた}になる、正^{ただ}しい人^{にん}間^{げん}を選^{せん}挙^{きよ}するのだ。い

ままでは、そういうあたりまえのことすらできなかつたが、いよ

いよそれができる、自^じ由^{ゆう}な時^じ代^{だい}になつたのを、知^しつてゐるね。」

「はい、自^じ由^{ゆう}主^{しゅ}義^ぎの時^じ代^{だい}でしょう。」

「そうだ、自^じ分^{ぶん}が正^{ただ}しいと信^{しん}じたとおりにする、それがなにより

貴^{とうと}いことなのだよ。」

「わかりました。それには、自^じ分^{ぶん}がもつと正^{ただ}しく、強^{つよ}いりつぱな

人^{にん}間^{げん}となるんですね。」

「そう、そう、前からだれにも、人間平等の権利はあったのさ。それを無智と卑屈のため、自ら放棄して、権力や、金銭の前に、奴隷となってきたのだ。」

「親方、私たちは、いままで、自分というものをよく考えなかつたんですね。」

「それだから、氣力も、勇氣もなかつたのだ。」

「金とか、学問とかいうことより、なによりみんなが正しい考えをもつ人間となることが大切なんです。」

「それが民主主義なんだよ。」

こうして、正吉は、前の主人から、勇氣づけられて帰りました。それから、ひまがあれば、選挙候補者の演説を聞き

歩くことにしました。選ぶには、まず、その人を知らなければならぬからです。まだ世の中のほこりに汚されぬ若者の感覚は、何人が心にもないうそをいったり、あるいは、飾らず真実を語るか、また謙遜であつて、信用するに足りるか、どうかということを、目で見わけ、耳で聞きわけたのでした。そして、ごまかしの誘惑や、一時の宣伝にとりことなるのを警戒し、自己の信ずる人に投票しようとしたのであります。

そうするうちに、いよいよ選挙日となりました。おりしも、春のいい季節であつて、正吉らの投票場は、近くの小学校にきめられました。彼は、午前のうちに出かけ、多くの人たちとともに、列をつくつて並んだが、その長い列は、えんえ

んとして、さながら長蛇ちようだのごとく、運動場うんどうじようの内側うちがわを幾いく巡めぐりもしたのであります。

大空おおぞらの雲くもの色いろは、柔やわらかに、吹ふく風かぜも暖あたたかでした。どこからか、きりの花はなの甘あまい香においが流ながれてきました。あちらにある物置ものおきの軒端のきばへ、すずめが巢すつくを造るとみえ、たえず往來おうらいしていたが、飛とんでくるすずめは、わらくずや、糸いときれのようなものを食たべていて、彼らかれは、壁板かべいたの壊こわれた穴あなから、出でたり、はいたりしていました。

「もう、田舎いなかも春はるだろうな。」と、正吉しょうきちは、紫むらさき色いろを帯おびて、かすみたつ空そらを仰あおぎました。考かんがえるともなく、子供こどもの時分じぶんが、頭あたまの中なかへよみがえったのであります。

かげろうの上のぼる、かがやかしい田畑たはたや、若草わかくさの芽めぐむ往来おうらい
 や、隣家りんかの垣根かきねに咲さく桃ももの花はなや、いろいろの景色けしきが浮うかんで、な
 つかしい思おもい出でにふけると、あのきれいな鳥とりが田圃たんぼの中なかのかきの
 木きにきて止とまったのが、まだ昨日きのうのことであるように、いきいき
 と思おもい返かえされるのです。

「あのちの後まちは、町とりやの鳥屋とりでも、あんな鳥とりを二度どと見たみことがない。

なんという名なの鳥とりだつたらうな。」

彼かれは、いまでも世界せかいのどこかに、同おなじ鳥とりがすんでいるだろうと
 は思おもいながら、なんとなしに、またと見みられぬようなはかなさを
 感かんずるのでした。そして、そのため自分じぶんは木きから落おち、びつこと
 なったにかかわらず、その苦痛くつうは忘わすれられて、ただ美うつくしい鳥とりに對たい

し、限り^{かぎ}ないとしさと悲^{かな}しみがつるばかりでした。

「あのとき、もち棒^{ぼう}があれば、とれたかもしれぬ。」

くちおしく思^{おも}うけれども、また、子供^{こども}の時分^{じぶん}のことで、よく飼^かい方も知^しらぬから、殺^{ころ}せばかわいそうだったとも考^{かん}え、かえつて逃^にげたのを喜^{よろこ}ぶ心にもなるのでした。彼^{かれ}は、しばらく列^{れつ}の中^{なか}に立^たちながら、夢^{ゆめ}を見^みる氣^きで空^{くう}想^{そう}をつづけると、ふいに、空^{そら}から、ひらひらと、花^{はな}びらの落^おちるように、一^いぴきの黒^{くろ}いちようが降^おりて、そばの砂^{すな}の上^{うえ}で体^{からだ}を休^{やす}めたのです。

「花^{はな}のない、人^{にん}間^{げん}ばかりのところへ、どうして、ちようが、飛^とんできたのか。」

自然^{しぜん}界^{かい}には、想^{そう}像^{ぞう}もつかぬようなことがあるものだと思^{おも}い

しました。正吉しょうきちは、いまでは子供こどものときとちがつて、めずらし

いからといって、すぐ手てを出だして、捕とらえようとはしませんでした。そのかわり、おちついて、色いろや、姿すがたをよく観かん察さんする機き会かいをあた与よられたのを喜よろこび、ちようの羽はねについている模も様ようまで、つくづくとながめたのでした。

「なんという、不思議ふしぎな、きれいなものだろう。神かみさまの力ちからでもなければ、つくれぬものだ。」

一むし匹しきの虫むしでさえ、子細しさいに見みれば、見みるほど美うつくしいのを知しりました。はじめで、それきに気きがつくと、雲くもも、花はなも、すべてがおよろくばかり美うつくしかったのであります。

「いいな、自然しぜんは！」と、彼かれは、眠ねむりから目めがさめたごとく、感か

んたん
嘆しました。

ひとり自然しぜんが美しいばかりでなかった。こうして、見み、考かんえ、
喜よろこび、希きぼう望をもつ、人にんげん間げんがまた偉いだい大であり、貴とうとい存そんざい在である
のを知しりました。さらに、人にんげん間の一人ひとりである、自じぶん分とうとが尊とうといもの
であるのを知しつたのです。

正しょうきち吉きちは、選せん挙きよに一ひ票ひょうを投とうじてから、社しゃ会かい人じんになれたと
いう、強つよい自じ覚かくをもつと同時どうじに、自しぜん然ぜんの観かん察さつから、また仕しごと事ことの
うえにも大だいなる自じ信しんを得えました。

「おれのいままでの仕しごと事は、みんなうそだったぞ。」

彼かれは、自じぶん分の部へや屋やへもどると、大おお声こえで叫さけんだのです。そして、
考かんえたのでした。

田舎いなかから、町まちへ出て、縫ぬい箔屋はくやへ弟子入でしりをして、そして、習なら
 った細工さいくは、すべて魂たましいの入はいらない、ごまかしものだった。たとえ
 ば、帯おびや、羽織はおりや、着物きものにしろ、刺繡ししゅうをしてでき上あがった、花はな
 や、ちようや、鳥とりは、ただひな形がたに似にせたのであり、絵本えほんから写うつ
 したものであるから、死しんでいて、生いきている姿すがたでなかつた。そ
 ればかりでなく、品物しなものの使つかい道みちがまた死しんでいた。というのは、
 金持かねもちの奥おくさまや、令嬢れいじようがたが着きるためであつて、ただそう
 したおしやれの人ひとたちの虚栄心きよえいしんを満まん足ぞくさせるに役立やくたつだけだ
 った。そう思おもうと、たとえ自分じぶんの芸げいは未熟みじゆくながら、考かんがえずにい
 られようか、平常ふだんはたんすや、行李こうりの中なかへしまいこまれて、お氣き
 にいらなければ、そのまま虫むしにくわれ、永えい久きゆうに捨すてられるの

である。だれしもそうと知れば、良心のあるかぎり、自分の仕事に對して、あわれみと恥ずかしさを感じるであらう。つつましやかなる自然は、正吉にふたたび、子供の時分のまじり気ない無邪氣さと、勇氣を呼びもどしたのでした。それは、ただ正しく生きようと希う人間のもつ、りっぱな精神でありました。

「おれは、自分のもてる能力が、たとえわずかばかりにせよ、これを發揮して、世の中の人々のために、役立てよう。」
ふとしたことが、彼の体に長い間宿り、眠っていた正義心と、芸術心の芽を、いっしょにめざめさせたのでした。
その後、彼の描いた、さまざまの水彩画や、鉛筆画が、工

うじょう
場の壁にはられました。

そして、素直で特色豊かな絵は、多くの工員たちの間に
にんきよ
人気を呼びました。なぜなら、疲れたものの精神に
ほが
朗らかさをあたえることによって、彼らを慰めたからであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 13」講談社

1977（昭和52）年11月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「心の芽」文寿堂出版株式会社

1948（昭和23）年10月

初出：「少国民の友 22巻11号」

1946（昭和21）年2月

※表題は底本では、「心《こころ》の芽《め》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年10月25日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心の芽

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>